

長野県清里飯盛山

## 多様性を求めて

埼玉県の花は荒川河川敷きの田島ヶ原に自生する桜草。小海線沿いの観光パンフレットにも桜草の写真があった。調べると飯盛山（平沢山）にも群生するらしい。その桜草を求めて雨の中を登る。

飯盛山への登山道には牧畜のためか有刺鉄線が張られているが、近くに牛などの動物は見られない。里には水を張った田んぼと見間違ったビニールシートが光っている。今は高原野菜に転化し、牧場は放棄されているのかもしれない。

そんな中、山躑躅や蓮華躑

TK

躑躅は滴を着け鮮やかな朱色に輝き、生き生きしとしている。数株の菖蒲も雨の中真つ盛りである。



やがて、雨は上がり、八ヶ岳や南アルプスの山々が少し

ずつ顔を覗かせ始める。富士山も足元は隠し、雲のベールを纏ったり取ったりして現れてくれた。その富士山の左に見える飯盛山頂上付近は裸地化しており、養生のため一面にネットが敷かれて無残な姿が引き立ってしまっている。以前登ったSMさんも驚いていた。

桜草のルーツはヒマラヤ！と鷲谷いづみ著（岩波ジュニア新書）の『さとやま』に記載されていた。白山小桜もサクラソウ科であることを考えると領け、飯盛山（平沢山）にあることも解る。

牛や馬など家畜は下草などは食べるが、蓮華躑躅は毒があるので食べず残る。人間自身も肥料作りや茅葺きのために、下草を刈ったり、野焼きをして管理していた。こうい

った半自然の里地、里山を『さとやま』と鷲谷いづみ氏は定義している。鷲谷いづみ氏は『生物多様性』や『さとやま』などに関する研究をなされており、易しく解りやすく解説した著書も多く、上記の本も中学生を対象とした本であるが内容はかなり濃い。桜草は『さとやま』の環境や河川敷きのような攪乱のある土地を好むとある。桜草の葉や茎は食べられてもあるいは焼かれても芽や根は残り枯れずに生き残り、下草が繁る前に芽を出し、花を咲かせ、やがて実を結ぶ。



しかし、お目当ての桜草は  
笹原の中に5、6株見つけた  
が群生にはほど遠かった。群  
生地は他の場所だったのか？  
季節外れだったのか？ そう  
であって欲しいが・・・？ 半  
自然の下で豊かだった『さと  
やま』は、手付かずとなると  
スキや笹の単調な草原や、  
光の射さない森林となり、生  
物多様性は低下する。清里も  
例外ではないのかもしれない。

中学生だろうか大集団と出  
会う、急ぎ足でまさしく『ス  
ポーツ』である。「桜草だ！富  
士山だ!!」等とよそ見などし  
ていない。それはそれで良い  
とも思うが、生徒の中にはじ  
つくり花を観たり、景色を楽  
しみたい生徒もいるのではな  
いのだろうか？画一化、一様  
化、一律化、単一化されてい  
る。皆がみんな同じ顔、金太

郎飴と同じようである。山の  
楽しみ方、接し方、視点は人  
それぞれ違って良いし、そう  
あって然るべきである。もし  
て互いに認めあい、尊重しあ  
うことが多様性というもので  
あり、人に優しくなるのでは  
ないだろうか？



【山行日】 H 27 年 6 月 3 日

【参加者】 佐々 KM、O 知、  
福 DT、TK

